様式２ｂ

３３	岡山県立岡山御津高等学校	全日制	総合学科	２６～２９

平成２９年度　個々の能力・才能を伸ばす特別支援教育
研究開発実施報告書（成果報告書）（要約）

１　研究開発課題

高等学校において発達障害，あるいは，その可能性のある生徒への障害の改善・克服をするために，必要な知識・技能・態度を身に付ける領域（自立活動）を取り入れた教育課程を編成し，個々の目標に向かって自己理解や社会性に関連した内容を少人数，または１対１で指導することに関する研究とする。

２　研究の概要

本研究では，高等学校において，発達障害を含む障害のある生徒に特別支援学校の特別な指導領域である「自立活動」を選択授業として設定し，①教育課程編成の在り方，②具体的な指導内容とそれに関する指導方法と評価方法，③指導形態について検討を進める。また，通常の授業においても特別支援教育の観点を取り入れた授業づくりを行い，「自立活動」との関連をもたせ，指導がより効果的になるための方法を整理する。

３　研究の目的と仮説等

（１）研究開始時の状況と研究の目的

本校は，平成１７年４月に１学年４学級（定員１６０名）の総合学科として誕生した。生徒の学力については，中学校の学習内容を十分に理解できない生徒の割合が高く，授業への取組は消極的である。また，発達障害，あるいは，その可能性のある生徒は毎年度入学してきており，その数は増加傾向にある。

昨年度と同様，今年度も指導対象を，受講を希望する１年次生とし，入学前から保護者や中学校と連携を取り，研究を進めることとした。

研究の目的は，発達障害，あるいは，その可能性のある生徒に対する後期中等教育の障害の改善・克服をするための知識・技能・態度を育てる方法に関する，効果と課題について提言することである。

（２）研究仮説

障害の改善・克服の知識・技能・態度を育てる特別支援学校の特別な指導領域である「自立活動」を設定し，その内容を小集団指導，場合によっては個別指導することで，高等学校における学習，生活，さらには，卒業後より豊かな

生活を過ごすことがより可能になる。

（３）教育課程の特例

高等学校学習指導要領の必履修科目,総合的な学習の時間,特別活動に加え,特別支援学校の特別な指導領域である「自立活動」を加えて教育課程を編成する。自立活動の指導については，選択授業の一つとして扱い，実態から想定される指導内容や授業時間数・単位数は以下のとおりである。

教育課程の特例の内容	指導内容	授業時間数・単位数等
自校における自立活動として １年次生に実施 校内名称「ｿｰｼｬﾙ･ｽｷﾙ･ｱｯﾌﾟ」 略称「ＳＳＵ」	コミュニケーション活動 ストレスマネジメント アサーショントレーニング スケジュール管理　　等	70 時間・２単位時間 ２講座 （卒業単位に含む）

（４）個々の能力･才能を伸ばす指導（現行指導要領における一斉指導の改善工夫等）

①　特別支援教育の観点を取り入れた授業づくり

新年度にあたり，教員の入れ替わりもあったため，職員会議において次の項目について確認した。

ア　普通教室について

・教室前黒板には，日付，日直名以外の掲示はせず，授業に使うスペースを確保する。

・掲示物は，前黒板左横の掲示板や教室後方の掲示板・黒板を有効に活用する。

イ　授業始めの「めあて」と「授業の流れ」の明示，授業終わりの「振り返り」

・時間の確保の実践を呼びかけている。また,生徒配付のプリントの文字は,できる限り「ゴシック体で１２ポイント」を使うように勧めている。

ウ　少人数講座やチームティーチングの実践

・総合学科であるため，科目選択の約６５％で２０人以下の少人数授業を実施している。１年次での国語，数学，英語，２・３年次での数学では習熟度別や少人数授業を，商業や情報など実技を伴う科目や，一部の学校設定科目ではチームティーチングを行っている。また，ホームルームは二人担任制で，さらに，年次付き教員が副担任として担任をサポートする，きめ細やかな制度をとっている。

エ　すべての普通教室に天吊型プロジェクターを導入

・視覚的な支援を強化するため，すべての普通教室に天吊型のプロジェクターを導入した。書画カメラが７台のみであるが，タブレットを購入し，視覚支援の整備を進めている。

②　個々の能力・才能を伸ばす指導

①の実践と実態把握を含めながら，個々の得意なところを把握し，一斉指導

に生かせるようにする。「産業社会と人間」や「国語総合」などの授業では，授業では見られない部活動や委員会活動での活躍を自己ＰＲとして書くことにより自己肯定感を高めるように取り組んだ。

③　「ＳＳＵだより」と「ＳＳＵだよりＰＬＵＳ」の発行等

全教員に「自立活動」（校内名称：「ソーシャル・スキル・アップ」（ＳＳＵ））の授業の様子を知らせるために，「ＳＳＵだより」を７号発行した。これにより，授業内容や受講生の様子の一端を知ることができ，受講者の日常に気を配ってもらえるようになった。また，「ＳＳＵだよりＰＬＵＳ」も発行し，「自立活動とは何か？今後，どのように制度化されていくのか？」など，全教員の研修に寄与できるよう取り組んだ。

また，学期終わりには，授業の様子を職員会議で授業の様子やそれぞれの生徒の課題を報告し，引き続き必要な支援を全教員に周知し，協力を求めた。

（５）研究成果の評価方法

・個別の指導計画に基づく，目標設定や指導内容の妥当性の検討
・生徒や保護者へのアンケート形式による意識調査
・成果報告会での評価
・運営指導委員会による総括

４　研究の経過等

（１）教育課程の内容

自己理解と社会性の知識，技能を習得する「自立活動」（校内名称：「ソーシャル・スキル・アップ」）（以下：「ソーシャル・スキル・アップ」とする）２単位を開設し，４名以下の少人数の指導形態で２講座を開講する計画で受講生徒を募集した。講座の「趣意書」と「受講希望票」を合格通知に同封し，さらに，合格者登校日の全体の場において研究の趣旨と授業内容などを説明した上で，受講を希望する６名の生徒と保護者と共に面談を持った。その後，彼らの希望が研究の趣旨と合致しているかを見定めて，研究開発委員会において検討し，６名の全員の受講を決定した。前年の反省を踏まえ，放課後に実施するのではなく，「自立活動」は「数学Ａ」との選択として通常の日課の中で開講した。

授業形態については，小集団として学習を進めるが，個々の目標を立てて，状況に応じて個別の対応がとれるよう３人のチームティーチング体制で実践を行った。

講座名	授業日	生徒	教員	課題
ア講座	火・２限 金・１限	女子２名	３名	対人関係面
イ講座	火・６限 金・３限	男子３名 女子１名	３名	対人関係面

（２）全課程の修了認定の要件

・欠課時数が指導時数（３５×２単位）の３分の１以下のとき履修とする。
・学習に対する意欲や態度，進歩の状況などを踏まえ，「ソーシャル・スキル・アップ」の目標からみて満足できると認められることで修了とする。

（３）研究の経過

	実施内容等
第一年次 26年度	４月　準備委員会の設置 ５月　中学校への情報収集 ７月　第１回運営指導委員会 神奈川県立修悠館高等学校　訪問 文部科学省事業説明会　参加 第１回校内研究開発委員会「対象生徒候補者選び」 ８月　滋賀県立日野高等学校　資料収集 ９月　候補生徒　面談 福岡県立東鷹高等学校　訪問 10 月　第１回教員研修会「高校生の発達障害」 対象生徒　面談 保護者への説明（電話・文書） 11 月　第２回運営指導委員会 京都府立朱雀高等学校　訪問 岡山県総合教育センター　訪問 12 月　保護者面談 徳島県発達障がい教育研究会　参加 １月　文部科学省事業研究協議会　参加 第３回運営指導委員会 島根県立邇摩高等学校　訪問 ２月　徳島県立海部高等学校　訪問 神奈川県立綾瀬西高等学校　訪問 第２回校内研究開発委員会「個別の教育支援計画の検討」 ３月　第１回校内企画委員会 ３月　中学校への聞き取り　訪問

	※毎週金曜日２時間目に担当者会を開催
第二年次 27年度	４月　第１回校内企画委員会　第１回校内研究開発委員会　合同会議 （＝研究開発企画委員会） ４月「キャリア活動」指導実施　開始 ５月　第１回校内研修会 「発達障害と共に生きる」当事者を招いて （岡山県発達障害者当事者会「わ」の会　代表　瑠璃真依子氏） ６月　第１回運営指導委員会 ６月　第２回校内研修会（１年次団） 「アセスメントシートの結果分析会」 （岡山県総合教育センター特別支援教育部 指導主事　定久照美氏） ７月　第２回校内研究開発委員会 ７月　保護者懇談（支援の内容の説明と修正） ８月　第３回校内研修会 「発達障害の人とスムーズなコミュニケーションをするために ～ＳＳＴやアンガーマネジメントを活用して」 （ノートルダム清心女子大学　準教授　東俊一氏） 10 月　佐賀県立太良高等学校　訪問 10 月　岡山市立石井中学校通級教室　訪問 10 月　第４回校内研修会 「発達障害のある高校生を支援するための授業づくり」 （川崎医療短期大学　講師　重松孝治氏） 11 月　中間報告会（公開授業及び研究協議） 12 月　兵庫県立西宮香風高等学校　中間報告会　参加 12 月　徳島県発達障がい教育研究会　参加 12 月　保護者懇談（支援結果の報告と次年度に向けて） 12 月　第３回校内研究開発委員会 １月　第２回運営指導委員会 ２月　文部科学省事業研究協議会 ２月　第４回校内研究開発委員会 ３月　第５回校内研修会 「発達障害（二次障害）の視点を踏まえた 生徒への関わり方について～非行に至る生徒の特徴～」 （岡山県赤磐市立磐梨中学校長　田上善朗氏） ３月　第２回校内企画委員会 ３月　中間報告書の発刊 ３月　合格者登校日において，次年度希望者募集 ３月　中学校への聞き取り　訪問 ※担当者会を月曜日５・６限，水曜日４限，金曜日６限に開催 （＊５月　専門指導員派遣事業を活用）
第三年次	４月　第１回校内企画委員会　第１回校内研究開発委員会　合同会議

28年度	４月　３年次生対象生徒の観察・検証　開始 ４月　「ソーシャル・スキル・アップ」指導実施　開始 ５月　第１回運営指導委員会 ５月　新入生検討会 ６月　文部科学省実地調査 ７月　第２回校内研究開発委員会 ７月　保護者懇談（支援の内容の説明と修正） ８月　校内研修会 「発達障害のある卒業生の進路」 岡山市発達障害者支援センター　関川裕美　氏 11 月　文部科学省事業　成果報告会 11 月　公開授業・研究授業・最終報告会 12 月　京都府立田辺高等学校　成果報告会視察 12 月　保護者懇談（支援の内容の説明と修正） １月　第２回運営指導委員会 ２月　第３回校内研究開発委員会 ３月　第２回校内企画委員会 ３月　合格者登校日において，次年度希望者募集 ３月　中学校への聞き取り　訪問 ３月　最終報告書の発刊 ※担当者会を月曜日５・６限，水曜日４限，金曜日３・４限に開催 （＊５月　専門指導員派遣事業を活用）
第四年次 29年度	４月　第１回校内企画委員会　第１回校内研究開発委員会　合同会議 ４月　２年次生対象生徒の観察・検証　開始 ４月　「ソーシャル・スキル・アップ」指導実施　開始 ５月　第１回運営指導委員会 ５月　新入生検討会 ７月　第２回校内研究開発委員会 ７月　保護者懇談（支援の内容の説明と修正） ８月　徳島県発達障がい教育研究会　報告 ８月　校内研修会 「愛着障害について」　和歌山大学　米澤好史　氏 11 月　公開授業・成果報告会 11 月　兵庫県立香風高等学校　成果報告会視察 12 月　徳島県発達障がい教育研究会　参加 12 月　大阪府立岬高等学校　訪問 12 月　保護者懇談（支援の内容の説明と修正） １月　第２回運営指導委員会 ２月　実施報告書の発刊 ２月　第３回校内研究開発委員会 ３月　第２回校内企画委員会 ※担当者会を火曜日５限，水曜日２・３・４限，金曜日４・５限に開催

（４）評価に関する取組

第一年次 (26 年度)	・個別の指導計画に基づく，目標設定や指導内容の妥当性の検討 ・運営指導委員会による総括
第二年次 (27 年度)	・個別の指導計画に基づく，目標設定や指導内容の妥当性の検討 ・生徒や保護者へのアンケート形式による意識調査 ・中間報告会での評価 ・運営指導委員会による総括
第三年次 (28 年度)	・個別の指導計画に基づく，目標設定や指導内容の妥当性の検討 ・生徒や保護者へのアンケート形式による意識調査 ・最終報告会での評価 ・運営指導委員会による総括
第四年次 (29 年度)	・個別の指導計画に基づく，目標設定や指導内容の妥当性の検討 ・生徒や保護者へのアンケート形式による意識調査 ・成果報告会での評価 ・運営指導委員会による総括

５　研究開発の成果

（１）実施による効果

①　対象生徒への効果
生徒の感想は以下のとおりであり，指導の効果が現れている。

●授業の感想：１０月

○人間関係など自分のためになることや大切なことを教えてくれるのでよかった。
○イライラしたりする時に自分の気持ちをコントロールできるようになった。
○妥協点の模索と根拠の設定，知識とボキャブラリーが向上した。
○理由が少しずつ言えるようになった。Ｃ君のような美しい発表がしたい。
○他の人の意見を聞いて妥協する大切さについて知った。

●１年間を振り返って：１月　（原文のまま）

生徒Ｄ　「ＳＳＵを受けて」

私は前からコミュニケーションを取るのが苦手でした。だけど今は少人数なら自分から話したりが出来るようになりました。今でも人前で話すのは苦手だけど，ＳＳＵに来てから，クラスで自分の考えを発表するのが少しずつできるようになりました。以前までは自分が発表する時に皆の反応が気になって自分の考えを発表することが出来ませんでした。けどＳＳＵではお互いに意見交換をしたり，折り合いをつけることで意見をまとめることができました。さらに，

クラスでも自分の考えを発表することに少しずつ自信がついてきました。でも，みんなの前で発表することと，自分の考えを文にすることにまだ苦手意識があってうまく自分の意見を言うことがすごく苦手なので，これからもＳＳＵで自分が思ったことが文にできるようにがんばりたいと思っています。

② 教員への効果

ここで，５月と１０月に実施した教員向けアンケートより分析を行う。

今までの実績もあり，「「ソーシャル・スキル・アップ」の受講生は飛躍的に成長している」とのコメントもあり，研究の成果は他の教員も認識している。「他の生徒にも有益なのではないか」「他の生徒のサポートを考える際の参考にしたい」「今後も継続していく必要性を感じる」といった意見もあり，「本校の個別の支援・指導が必要な生徒への対応は進んでいるか？」という問いに対して，８０％以上の教員が「進んでいる」「ある程度進んでいる」と回答している。「自分自身の知識を深めたい」「もう少し，授業における支援を研修することが必要」「知識はあるが，経験できないことも多いはず」「自立活動の指導者について，特定の人に限定せず，多くの先生方が経験するようにすればよい」など，積極的な意見も見られた。

③ 保護者等への効果

親子とも希望して受講しているので，自立活動の必要性は理解している。夏季休業時と冬季休業前の三者懇談において，それまでの学習について報告をした。どの生徒もすべてが改善されたわけではないが，教員の実態把握，指導内容，指導方法については理解を示している。生徒のアンケート結果から，まだ，消極的な表現は見られるが，自分自身を理解している成長・発達の過程であるということを共通理解した。

④ その他

ア 地域の理解等

学校評議員会で研究の趣旨については，一昨年度から理解されていて，その成果についても評価を得ている。一方，教員の負担増を心配する声も多くあった。

成果報告会には，前年度の報告会同様の外部参加があり，関心の高さを伺うことができた。高等学校だけではなく，中学校・特別支援学校からも多くの参加があり，連携の重要性を感じた。

イ 昨年度の受講者の様子

昨年度受講していた３名の生徒が２年次になり，今年度は自立活動を受講していないが，昨年度の指導効果を確認するために，今年度の様子について以下のとおり報告する。

●生徒１

・提出物や課題の提出はきちんとできている。やらなければいけないことはやるという意識がでてきた。

・進路については，他者との関わりが少ない技術職を希望しているが，まだ漠然としている。
・友人関係を保つことができてきた。まだ，友人に対する言葉遣いがきつく，断定的で命令口調がみられ，関係を保つことが難しいこともある。
・自分からカウンセリングを受けて，精神的安定を心掛けている。

●生徒２
・クラスになじみにくい様子が見られる。集団行動を乱すことはしないが，一人で行動していることが多い。
・思い込みで早とちりをする傾向にあり，他者の意図をつかむことが難しい時がある。
・周囲への不満を言うことが多く，周囲への不満と同じことを自分が行っていても気付かないことがある。
・配付物やプリント類の管理が苦手である。必要な資料の取捨選択が難しい。
・１年次からアルバイトは継続している。

●生徒３
・部活動の部長として活躍していて，何か問題があっても解決に向けて話し合おうとする。
・学校生活の様子も安定していて，友達と楽しそうに過ごしていることが多い。
・自分から笑顔で挨拶ができるでき，挨拶や礼儀については普段から心掛けている。
・大学への進学を希望し，学習面も落ち着いてきた。
・文化祭など学校行事では特に自分の思いが強くなりすぎて，周りが見えなくなることがある。

（２）実施上の問題点と今後の課題

今年度については，学校訪問等で寄せられた質問について，紹介することで，実施上の問題点と今後の課題を整理したい。

Ｑ１　学習面や生活面で課題のある生徒たちを取り出して指導する意義はあるか。
（集団の中でできるのではないかという意味での質問。）

Ａ１　対象となる生徒は，多くが全体指導の中での指示や説明を聞くという力が弱いことが分かってきた。そのため，自立活動のように実態に応じた指導内容が設定できる指導を行うことが効果的と考える。また，個別の指導によって，キーパーソンとなる教員と人間関係がつくれ，それを基に全体指導の中でも力を発揮することができると考えている。

Ｑ２　通級による指導を受けている生徒の自尊心は傷ついていないか。

Ａ２　総合学科は，選択授業が多くあり，他の生徒に気付かれずに受講することはできる。　気付かれたとしても，公募して，自分から希望しているので，

通級による指導を受講するということに合意形成をしており，他の生徒に何か言われても，自尊心が傷つくことはないと思われる。しかし，普通科等，選択授業が少ない場合は，放課後等の実施も考えられることから，受講する生徒自身の自尊心への配慮と周囲への理解が必要である。

Ｑ３　対象生徒をどのように選んだか。

Ａ３　研究２年目（平成２７年度）は，２年次生を対象とした。前年度の１年次生の１学期に実態把握を行い対象の生徒を絞り，この授業の説明を行い，受講へとつなげることができた。この場合，自立活動の指導が学校としても必要な生徒を対象とすることができる。しかし，今まで支援を受けてきた生徒でないことが多いので，授業の趣旨を理解してもうらのに時間がかかるということがある。また，中学校から特別な場で支援を受けてきた生徒が１年次から一貫して支援を受けることができないということがあげられる。

　そうしたことから研究３・４年目（平成２８年度・２９年度）は，１年次生を対象とした。合格者登校日に説明し，希望をとり，面談を行った。受講した生徒は，授業の趣旨を早く理解し，授業への取組がとてもよかった。しかし，希望しなかった生徒の中には学習上，生活上の課題が多い生徒も在籍し，受講されないということがあり，１年次生からの受講と２年次生からの受講と組み合わせて考えていく必要がある。

Ｑ４　単位認定はどうしているのか。

Ａ４　欠課時数が指導時数の３分の１以下の場合，履修を認定し，さらに，学習目標からみて満足できると認められる場合は，単位認定会議を経て修得が認められる。

Ｑ５　通級による指導では，具体的にどんな指導をすればよいか。

Ａ５　自立活動の指導であるので，学習上，生活上の困難さから，生徒の実態やニーズに応じたものでなければならないが，現在と将来の学習上，生活上の改善・克服を考えると「ソーシャル・スキル」をキーワードに「コミュニケーション・対人関係の力をつけること」「自己理解ができること」「学び方を学ぶ」という３点が中心になった。また，「高校生だからこれは当然，わかっているだろう」と思われる内容も一つ一つ丁寧に実態に応じて，進めることが重要である。自立活動の６区分とその項目を参考にしながら具体的な指導内容を設定する必要がある。

Ｑ６　ソーシャル・スキルばかりやることはよくないのではないか。

Ａ６　いわゆるスキルに偏るのはよくないが，今までの生活体験の中で気がついていないことも多くみられ，まずは振る舞い（スキル）を教えることも必要だと考える。自立活動の指導は，習得した技能を普段の生活で生かすことが大切であるので，何のためにスキルを習得するのか考えていくことと教員との信頼関係を構築した上で成立しているということを押さえておく必要がある。